HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サハ語・トルコ語・トゥバ語の目的語格標示
Author(s)	江畑, 冬生
Citation	北方言語研究, 4, 33-42
Issue Date	2014
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55117
Type	bulletin (article)
File Information	nls-4-04.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 4:33-42（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2014）

［特集　名詞項標示］

サハ語・トルコ語・トゥバ語の目的語格標示*

江 畑　冬 生
（新潟大学）

1.　はじめに

ユーラシア大陸の東西に広がる約 30 のチュルク諸語は，主格対格型の言語である．主語（S と A）には主格（形態的には明示的格接辞を欠いている）が現れる．目的語（O）には対格または主格が現れる（サハ語にはさらに分格も現れる）[1]．本稿はサハ語を含め 3 つのチュルク語を考察の対象とし，目的語の格標示に関して以下の 2 つの点から考察する．

第 2 節では，サハ語の目的語の標示の選択要因について考察する．サハ語では，対格・主格・分格という 3 つの形式が目的語として現れる．対格標示（目的語としてデフォルトの形式），分格標示，主格標示それぞれが，どのような要因の関与により選択されているのかを明らかにする[2]．

第 3 節では，トルコ語およびトゥバ語の目的語の標示の選択要因を明らかにする．表 1 に示すようにサハ語を含めた 3 つのチュルク語の対格接辞は同源であるが，どのような場合に対格標示が必要とされるのかについては，3 つのチュルク語それぞれの場合に異なっていることを示す．

［表 1］　目的語として現れる格

	トルコ語	トゥバ語	サハ語
主格	*kitap*　「本」	*nom*　「本」	*kinige*　「本」
対格	*kitab-ı*　「本-ACC」	*nom-nu*　「本-ACC」	*kinige-ni*　「本-ACC」
分格	—	—	*kinige-te*　「本-PART」

2.　サハ語の目的語

サハ語（ヤクート語）は，チュルク諸語のうち最も北東で話される言語である．サハ語

* 本研究は科学研究費「南シベリアチュルク系言語の調査研究：包括的記述と史的変遷の解明」（課題番号 25884027）による研究成果の一部であり，平成 25 年度新潟大学プロジェクト推進経費（奨励研究），新潟大学人文社会・教育科学系研究支援経費（学系基幹研究）および人文学部研究推進費による助成を受けている．本論文におけるデータのうち出典を明示していないものは，筆者自身によるフィールドワークまたは新聞記事を元に筆者が作成したコーパスデータにより得られたものである．査読者からの有益なコメントに深謝する．

[1] Johanson (1998: 53) はチュルク諸語全般について，この選択が話題性と特定性によることを “in the form of accusative or nominative complements according to certain rules of topicality/specificity” のように指摘している．しかし本稿の第 3 節で述べるように，この指摘は大まかな傾向として妥当であるに過ぎない．

[2] チュルク諸語のうち分格を持つ言語には，サハ語に他にトファ語とドルガン語がある．これらの言語の分格は，歴史的には処格 (locative) から発達したものである．

の目的語は，対格・分格・主格のいずれかで現れる．これら 3 つの形式のうち，対格標示をデフォルトと見なすことが可能である．語用論的な差異などを無視すれば，いかなるタイプの目的語にも対格標示が可能であるからである．一方，分格標示および主格標示は，それぞれある一定の条件を満たした場合にのみ出現する．そこで以下では，分格標示・主格標示それぞれを，対格標示と対比させながらその成立要因を見ていく[3]．なお本節の議論は，江畑 (2012) の第 10 章の内容に大きく基づいている[4]．

2.1　分格標示

結論から言えば，分格標示には節のモダリティ的タイプおよび名詞句の語用論的特性という 2 つの要因が働いている．

(A) 節のモダリティ的タイプ

例文(1)と(2)では, 動詞述語が命令法で現れている. 分格標示がなされるケースの多くは, このような命令法の動詞に支えられている．

(1)　*tyrgennik*　*tœrd-ys*　*gruppa-laax*　***xaan-na***　*bul-a*　*oʁus*
はやく　4-ORD　群-PROP　血-PART　見つける-CVB　AUX:IMP.2SG
「はやく AB 型の血液を見つけろ」

(2)　***uot-ta***　*ott-uum*　［Xaritonov (1947: 107)］
火-PART　点火する-IMP.1SG
「私が火をつけましょう」

命令法の動詞述語を欠く一語文の場合であっても，文に命令のニュアンスが含まれているならば，分格標示が可能である．次の(3)は，動詞述語の無い一語文である．この文は文脈や状況により「酒を注げ」「酒を寄越せ」「酒を買え」などに解釈できるのだが，いずれにせよ命令・要求のニュアンスを必ず帯びる．

(3)　*arɯgɯ-ta*
酒-PART
「酒を」　（文脈次第で「酒を注げ／酒を寄越せ／酒を買え」など）

一方，否定文においては分格目的語が現れることはない．以上のことから，分格標示が

[3] サハ語の音素目録は次のとおり： /p, b, t, d, č[tʃ], ž[dʒ], k, g, s[s~h], x[χ~q], ʁ, m, n, ň[ɲ], ŋ, l, r, j; a, aa, e, ee, o, oo, œ, œœ, ɯ, ɯɯ, i, ii, u, uu, y, yy, ɯa, ie, uo, yœ/．[s]と[h]とは同一の音素と見做せるが，音声的隔たりを考慮し区別して表記している．ロシア語からの借用語のうち固有語化していないものは，正書法からのローマ字転写により表記している．
[4] 江畑 (2012) の第 10 章は，日本言語学会第 132 回大会（東京大学，2006 年）および第 3 回動詞項構造研究会（名古屋大学，2010 年）における口頭発表に基づいている．

成立する要因の 1 つとして，節のモダリティ的タイプ（肯定的命令・要求）が存在すると言える[5].

(B) 名詞句の語用論的特性

節のモダリティ的タイプという条件を満たしていても，分格標示が不可能な場合がある．(4)のように，指示詞を含む名詞句に分格標示を施すことはできない．このような定性を帯びた名詞句が目的語となる場合，対格のみが用いられる．

(4) * *bu* ***kinige-te*** *aax*
この 本-PART 読む:IMP.2SG
（この本を読め）

次の(5a)のように，目的語に所有接辞が付加されている場合にも分格標示が不可能となる．(5a)が非文である事実は，所有接辞が付加された名詞句が定性を帯びるからである，というように定性に還元して説明することが可能である（なお(5a)で意図した意味を表す適格な文として，(5b)がある）．

(5) a. * ***bolop-pu-na*** *oŋor*
刀-POSS.1SG-PART 作る:IMP.2SG
（私の刀を作れ）[6]

b. *(miexe* ***bolot-to*** *oŋor)*
1SG:DAT 刀-PART 作る:IMP.2SG
「私に刀を作れ」

所有接辞が常に名詞句に定性を与えるとは限らない. サハ語の 3 人称単数所有接辞には，特定の所有者を含意しない用法がある．すなわち，字義通りには「A の B」を表すが意味上は単一の概念を表す場合である．例えば *ɯrbaaxɯ taŋah-a*（シャツ 服-POSS.3SG）は字義どおりには「シャツの服」だが，(6)では「シャツ用生地」の意味で用いられている[7]．この時，3SG 所有接辞が付加された目的語に分格接辞が後続可能である．このような場合には，3SG 所有接辞が名詞句に定性を与えないのだと説明することが可能である[8]．言い換えれば，(5a)で分格接辞を用いることができないのは，形態的要因（所有接辞）によるのではなく，語用論的要因（定性）によるのである．

---

[5] 分格標示に「節のモダリティ的タイプ」が関わる点の指摘としては，Stachowski and Menz (1998: 429) による “The partitive is only used in imperative or necessive expressions” というものがある．

[6] Ubrjatova (1966: 51) によれば，この文はドルガン語では適格である．庄垣内 (1992) がドルガン語をサハ語の 1 方言として扱うほど両言語は近い関係にあるが，分格標示の出現条件には違いがあることが分かる．

[7] 江畑 (2012) ではこのような 3SG 所有接辞の用法による「A の B」構造を「non-referential 型」と呼び，特定の所有者が含意される場合との形態統語的振る舞いの違いを示した．

[8] ただし同じ *ɯrbaaxɯ taŋah-a* が「ある特定のシャツの生地」の意味になることもある．この場合には分格を付加することはできなくなる．

(6) ***ɯrbaaxɯ*** ***taŋah-ɯ-na*** *ɯl-an* *bier* ［Ubrjatova (1950: 126)］
シャツ 服-POSS.3SG-PART 取る-CVB 与える:IMP.2SG
「シャツ用生地を取って与えろ」

同じく接辞法が関与する事例として，複数接辞付加の場合を検討する．(7)に見るように，目的語に複数接辞と分格接辞が同時に現れることが可能である．この事実もやはり，複数接辞の付加が名詞句の定性には関与しないためであると説明することが可能である．

(7) ***bergehe-ler-de*** *ɯl-an* *kulu*
帽子-PL-PART 取る-CVB PTCL:2SG
「［いくつかの］帽子を取ってくれ」[9]

最後に，分格標示と名詞句タイプの相関について検討する．固有名詞，人称代名詞，指示代名詞，疑問代名詞 *kim*「誰」は，分格形を持っていない．しかし疑問代名詞 *tuox*「何」が不定代名詞 *tuox =eme*「何か」として用いられる場合（不定かつ不特定であることを含意する）には，(8)のように分格接辞を付加して目的語として用いることが可能である．この事実は，分格標示に関して，名詞句タイプ（代名詞）よりも名詞句の語用論的特性（定性）が優先する場合が存在することを示している[10]．以上の議論から，分格標示を成立させるもう 1 つの要因は定性である．

(8) *aččɯk-taa-tɯ-m* ***tuox-ta*** *=eme* *buhar*
空腹-VBLZ-PAST-1SG 何-PART =CLT 調理する:IMP.2SG
「私はお腹が空いた．何か作ってくれ」

2.2 主格標示

結論から言えば，主格目的語の成立に最も強く働くのは形態的要因と名詞句タイプであり，部分的に語用論的要因も関与している．

(A) 形態的要因

Ubrjatova (1950: 118-120) も指摘するように，複数接辞・所有接辞のいずれかが付加した名詞句は，主格のままでは目的語として現れない．(9)の目的語には対格接辞が付加される必要がある．当該名詞句の語用論的特性は，文の成立には無関係である．

[9] この例文における述語 *kulu*「～(して)くれ」は小詞 (particle) と呼ばれるものの 1 つで，動詞由来の化石化形態である．
[10] *kim*「誰」と *tuox*「何」の振る舞いが異なる理由として，定性ではなく有生性が関与している可能性が考えられる．しかしながら，有生名詞であっても普通名詞の *ого*「子供」などは，分格目的語として使用可能である．従ってここでは有生性は有効でないことが分かる．

(9) * *kyn* *aajɯ* ***kinige-ler*** *aaʁ-a-bɯn*
日 毎 本-PL 読む-PRES-1SG
（私は毎日本を読みます）

(B) 名詞句タイプ

Ubrjatova (1950: 118-120) も指摘するように，固有名詞・人称代名詞・指示代名詞・疑問代名詞は，主格のままでは目的語として現れない．前節で検討した分格の場合とは異なり，名詞句の語用論的特性とは無関係にこの規則は維持される．例えば，(10)における目的語は不定かつ不特定な「何か」であるが，対格接辞を付加しなければ非文となる（なおこの例では後続の接語にも対格接辞が付加されている）．

(10) *xajaan =da* ***tug-u =eme-ni*** *sitih-ie-x-teex-pin*
どうして =CLT 何-ACC =CLT-ACC 達成する-VN.FUT-PROP-COP.1SG
「私は何としてでも何かを達成しなくてはならないのだ」

(C) 統語的要因

Ubrjatova (1950: 118-120) や Čeremisina 他編 (1995: 23-27) などの先行研究では，しばしば「主格目的語は動詞の直前でのみ用いられる」と指摘される．たしかに主格目的語の用例の多くは，動詞直前の位置にある．しかしこれには(11)のような例外が存在する．つまり統語的要因（動詞直前）は絶対的規則とは言えず，せいぜい傾向であるに過ぎない[11]．

(11) ***xahɯat*** ***kinige*** *bœʁœ* *aaʁ-a-ʁɯn =dii*
新聞 本 すごく 読む-PRES-2SG =ね
「君は新聞や本をすごく読むんだね！」

(D) 名詞句の語用論的特性

主格目的語の成立に関して語用論的要因が働くのは，先述の形態的要因および名詞句タイプによる制約をクリアした環境に限られている．以下の例が順に示すように，目的語が定ならば対格が，不定かつ特定的ならば主格が，不定かつ不特定ならば対格が用いられる．なお Aissen (2003) の示す Def > Indef & Spec > Non-spec のような階層のみでは，この分布を説明できないことになる（階層の両端に対格が現れることになるため）．

[11] 統語的な傾向はおそらく，情報構造と定性に還元できる．サハ語では旧情報ほど文頭に来るとされるが，後で見るように主格目的語は不定でなければならない（つまり聞き手にとって新情報である必要がある）．そのため，主格目的語は他の名詞句よりも前方に現れにくい傾向にあるのだと説明することが可能である．

［目的語が定 → 対格標示］

(12) *etii-te* *oŋor* ***etii-ni*** *aax*
文-PART 作る:IMP.2SG 文-ACC 読む:IMP.2SG
「文を作りなさい．その文を読みなさい」

［目的語が不定かつ特定 → 主格標示］

(13) ***ikki*** ***bɯtɯɯlka*** ***piibe*** *atɯɯlah-an* *bar-an*
2 瓶 ビール 買う-CVB AUX-CVB
「［彼らは］2 瓶のビールを買ってから....」

［目的語が不定かつ不特定 → 対格標示］

(14) ***tyært*** ***kinige-ni*** *atɯɯlas-pɯt* *kihi* ***beh-is*** ***kinige-ni***
4 本-ACC 買う-VN.PAST 人 5-ORD 本-ACC
belex *bɯhɯɯtɯnan* *tut-ar*
贈物 として もらう-PRES:3SG
「4 冊の本を買った人は，5 冊目の本をプレゼントとしてもらえる」

2.3 サハ語の目的語の格標示

本節ではサハ語の目的語の格標示を選択する要因について考察した．分格目的語を成立させる要因は節のモダリティ的タイプと名詞句の語用論的特性である．一方，主格目的語を成立させる要因は形態法と名詞句タイプであり，それらをクリアした環境でのみ部分的に語用論的特性も関与する．Skribnik (2001) は目的語の格選択について，情報構造のみからの説明を行う（対格目的語は “topical objects”，主格目的語は “rhematic unfocussed objects”，分格目的語は “rhematic focussed objects” だと述べる）．このような単一の指標に基づく説明はエレガントであるが，言語事実とは合致しない．

3. チュルク諸語の目的語の格標示

同系の言語であっても，格標示選択の要因は様々であり，それらの優先順位も異なっている．以下ではサハ語と系統を同じくする言語のうち，サハ語と比較的相違点の大きい言語としてトルコ語を，サハ語に比較的近い言語としてトゥバ語を取り上げる．トルコ語およびトゥバ語における目的語格選択の要因について検討した後，2 節で検討したサハ語の場合と比較する．

3.1 トルコ語の対格／主格

トルコ語の主格目的語が必ず動詞直前に現れることは，Göksel and Kerslake (2005) などにより指摘されている．言いかえれば，トルコ語では統語的要因が強く働く．形態法の関与について見ると，次の Aydemir (2004) からの例が示すように，複数接辞を含む目的語であっても主格で現れることがある（以下のトルコ語例文は正書法により表記する）．

(15) *Bu* *sabah* *(bazı)* ***makale-ler*** *oku-du-m.*
this morning some article-PL read-PAST-1SG
'I read some articles this morning.'

ただし，所有接辞を含んだ目的語はふつう，対格で現れる．Lewis (2000: 34) や Kornfilt (1997: 219) などのトルコ語に関する先行研究では，この形態的制約は名詞句の語用論的特性に還元して説明されており，目的語が定ならば対格標示が必須になるとされる[12]．従って，Göksel and Kerslake (2005: 176) による次の例文(16)が示すように，所有接辞が付加されていても，複合名詞を形成する働きの 3SG 所有接辞であれば対格接辞を必要としない．この事実が示すのは，語用論的要因が形態的要因に勝ることである．

(16) *Her* *yemek-ten* *sonra* *bir* ***Türk*** ***kahve-si*** *iç-er.*
every meal-ABL after a Turk coffee-POSS.3 drink-AOR
'After every meal (s)he has a cup of Turkish coffee.'

つまりトルコ語における主格標示の成立には，統語的要因（動詞直前）が最優先であり，次に名詞句の語用論的特性（定性）が関与してくる．

3.2 トゥバ語の対格／主格

はじめに，トゥバ語では形態的・統語的要因が強く働くとは言えないことを示す．例文(17)の目的語 *хол-ум*「私の手」には 1SG 所有接辞が付加されているが，それでも対格接辞を欠いている（以下のトゥバ語例文は正書法により表記する）．

例文(18)における対格接辞を欠く目的語 *ном-нар*「本」には複数接辞が付加されており，かつ動詞直前の位置にあるわけではない．つまりトゥバ語の主格目的語の成立に関して，形態的要因（複数接辞・所有接辞の付加）や統語的要因（動詞直前）は，少なくとも最優先とは言えない[13]．

(17) *Мен* ***хол-ум*** *чу-п* *ал-ды-м.*
1SG hand-POSS.1SG wash-CVB take-PAST-1SG
「私は自分の手を洗った」

(18) *Өөр-ү* ***ном-нар*** *белек-ке* *бер-ген.*
friend-POSS.3 book-PL present-DAT give-PAST:3
「友人は本を贈り物として与えた」

---

[12] 一方で Kornfilt (1997: 219) は "The direct object bears accusative case marking unless it is either non-specific or generic and incorporated" と述べ，特定性等からの説明を行っている．

[13] ただし Isxakov and Pal'mbax (1961: 132) は，主格目的語はそれを支配する動詞の近くに置かれ，それらの間に入るのはせいぜい 1 つの語である，と述べている．この記述の妥当性については再確認する必要がある．

Isxakov and Pal'mbax (1961: 132) は，目的語が定ならば対格標示されることを指摘する．しかし(17)の目的語 *хол-ум*「私の手」は，定であるのに対格標示を欠き反例となる．つまり，語用論的要因（定性）についても，対格／主格の選択に関する決定的要因とは言えない．

このように，トゥバ語の目的語格選択については，形態法・統語法・語用論のいずれも決め手にはならない．筆者には，トファ語（トゥバ語と非常に近い関係にあるチュルク語）の記述にヒントがあるように思われる．

Rassadin (1978: 36) は，トファ語では主格目的語がしばしば用いられる点，3 人称所有接辞が付加した名詞は主格目的語として用いられない点を指摘する．このうち 2 番目の指摘に注目したい．筆者の調査によれば，（トルコ語の(16)同様に複合名詞を形成する場合を除き）トゥバ語でも 3 人称所有接辞が付加した名詞が主格目的語として用いられることはない．さらに，所有接辞を含む名詞句が主格目的語として現れるのは，(17)のように目的語が主語の所有物である場合に限られるようである．言い換えれば，目的語そのものの性質だけではなく，主語と目的語の関係性も関与しているのである．トゥバ語における対格／主格の選択には，global な要因（本号所収の「北東ユーラシア諸言語の名詞項標示」2.6 節を参照）も関わっていると言えそうである．

3.3　チュルク諸語の対格標示と主格標示

2 節ではサハ語の目的語標示について，3 節ではトルコ語とトゥバ語の目的語標示について検討してきた．同系の 3 つの言語における対格標示と主格標示を使い分ける要因については，以下のようにまとめられる．

(A) サハ語では形態的要因（複数接辞・所有接辞の付加）と名詞句タイプが強く働き，部分的に語用論的特性が働く
(B) トルコ語ではまず統語的要因（動詞直前）から，次に語用論的特性（定性）から説明するとうまくいく
(C) トゥバ語では，少なくとも形態法・統語法・語用論的特性のみでは記述できない．主語と目的語の関係性（global な要因）も関わっている可能性がある

Erdal (2004: 362) は Old Turkic（以下 OT と略す）の目的語について，動詞直前以外の位置に現れた場合や，代名詞や所有接辞付きの名詞である場合にも対格接辞が必須でないことを指摘する．この指摘は，語用論的要因（定性）に関しても対格標示を決定づける指標とはならないことを意味する[14]．つまり OT においても，（トゥバ語の場合同様に）形態的・統語的・語用論的要因だけでは対格標示に関して満足のいく説明ができないことになる．OT から現代チュルク諸語に分岐する過程において，対格標示に関して言語ごとに異なる要因が発達してきたのではないだろうか．

[14] ただし Erdal (2004: 366) は，対格形は少なくとも不特定の対象には用いられないとも指摘する．

4. おわりに

本稿では，サハ語の 3 つの目的語の形式（対格・分格・主格）が用いられる要因について考察した後，3 つのチュルク諸語（サハ語・トルコ語・トゥバ語）の対格標示と主格標示を決定する要因について考察した．

サハ語の分格目的語を成立させる要因は節のモダリティ的タイプと名詞句の語用論的特性である一方，主格目的語を成立させる要因は形態法と名詞句タイプであり，それらをクリアした環境でのみ部分的に語用論的特性も関与することを明らかにした．サハ語・トルコ語・トゥバ語の 3 つを比べた結果，同系の言語であっても，目的語に対格標示と主格標示のどちらがなされるのかを決定する要因（の優先順序）は異なっていることを示した．

略号

-: 接辞境界，=: 接語境界，ABL: 奪格，ACC: 対格，AOR: アオリスト，AUX: 補助動詞，CLT: 接語，COP: コピュラ，CVB: 副動詞，DAT: 与格，FUT: 未来，IMP: 命令，ORD: 序数，PART: 分格，PAST: 過去，PL: 複数，POSS: 所有接辞，PRES: 現在，PROP: proprietive，PTCL: 小詞，SG: 単数，VBLZ: 動詞派生，VN: 形動詞．

参考文献

Aissen, Judith. (2003) Differential object marking: Iconicity vs economy. *Natural Language and Linguistic Theory*. 21, 435-483.

Aydemir, Yasemin. (2004) Are Turkish preverbal bare nouns syntactic arguments? *Linguistic Inquiry*. 35(3), 465-474.

Čeremisina, M.I., *et al*. (eds.) (1995) *Grammatika sovremennogo jakutskogo literaturnogo jazyka. Sintaksis.* Moskva: Nauka.

江畑 冬生 (2012) 『サハ語名詞類の研究 —接辞法と統語機能を中心に—』 東京大学博士論文.

Erdal, Marcel. (2004) *A grammar of Old Turkic*. Leiden/Boston: Brill.

Göksel, Aslı. and Celia Kerslake. (2005) *Turkish. A comprehensive grammar.* London/New York: Routledge.

Isxakov, F.G. and A.A. Pal'mbax. (1961) *Grammatika tuvinskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Vostočnoj Literatury.

Johanson, Lars. (1998) The structure of Turkic. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató. (eds.) *The Turkic languages.* 30-66. London: Routledge.

Kornfilt, Jaklin. (1977) *Turkish*. New York: Routledge.

Lewis, Geoffrey. (2000) *Turkish grammar.* [2nd edition] Oxford: Oxford University Press.

Rassadin, V.I. (1978) *Morfologija tofalarskogo jazyka v sravnitel'nom osveščenii*. Moskva: Nauka.

庄垣内 正弘 (1992) 「ヤクート語」 亀井 孝 他編 『言語学大辞典 第 4 巻』 544-550. 三省堂.

Skribnik, Elena. (2001) Variation of noun phrase markers in Siberian languages. W. Boeder and G. Hentschel (eds.) *Variierende Markierung von Nominalgruppen in Sprachen unterschiedlichen Typs*. 345-364. Oldenburg: Universität Oldenburg.

Stachowski, Marek and Astrid Menz. (1998) Yakut. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató. (eds.) *The Turkic languages*. 417-433. London: Routledge.

Ubrjatova, E.I. (1950) *Issledovanija po sintaksisu jakutskogo jazyka. I Prostoe predloženie.* Moskva/Leningrad: Nauka.

Ubrjatova, E.I. (1966) O jazyke dolgan. V.A. Avrorin (ed.) *Jazyki i fol'klor narodov sibirskogo Severa*. 41-68. Moskva/Leningrad: Nauka.

Xaritonov, L.N. (1947) *Sovremennyj jakutskij jazyk*. Jakutsk: Gosizdat JaASSR.

Object Case-marking in Sakha, Turkish, and Tyvan

Fuyuki EBATA
(Niigata University)

This paper investigates how the object case-marking is determined in three Turkic languages ― Sakha, Turkish, and Tyvan. In Sakha, the object NP is marked by either the accusative, the partitive, or the nominative. Accusative marking can be regarded as the default case-marking for objects. Partitive objects are conditioned by clausal modality and pragmatic property: the partitive is used in positive imperative or necessive clauses when the object is indefinite. Nominative objects are primarily restricted by morphological factor and NP-type: the nominative is never used when the object contains a plural or a possessive suffix, or when the object is a pronoun. Nominative objects are further restricted by pragmatic factor. Nominative marking is possible only when the object is indefinite-specific. Each Turkic language has different criteria for the choice of accusative/nominative marking. In Turkish, a syntactic criterion (immediately preverbal) is the most preferential and then definiteness also works. In Tyvan, neither morphological, syntactic, nor pragmatic factor is the crucial one for the marking. A global factor may also be relevant, since nominative marking for an object with a possessive suffix is possible only when the object is a possessee of the subject.

（えばた・ふゆき　ebata@human.niigata-u.ac.jp）